

馬琴俳諧年譜稿

播 本 眞 一

はじめに

本稿は、曲亭馬琴（明和四年（一七六七）～嘉永元年（一八四八））の俳諧活動を享和期（一八一八～一八〇三）まで概観するものである。一般に『南総里見八犬伝』を代表作とする読本作者として知られる馬琴は、幼いころから俳諧にしたしみ、天明・寛政期には兄の羅文らと連句を楽しんでいた。この寛政期は、同三年（一七九一）に『つかひはたしてに尽用而二分狂言』を發表した馬琴が黄表紙作者として一定の評価を確立した時期であった。一千石の旗本松平家の用人の五男として江戸深川に生まれた馬琴は、安永九年（一七八〇）十四歳で松平家を出奔、主家を転々とする渡り用人となる。その後、寛政二年の秋に京伝の門を叩き、蔦屋につとめ、寛政五年会田家に婿入りし町人となって戯作にうちこむ。しかしながら、拙稿「馬琴と江戸」（『国文学 解釈と鑑賞』平成十五年十二月号）で述べ

たように、馬琴は町人身分を厭い黄表紙作りを本来の仕事と認めていない。筆者は当時の馬琴の不充足を満たしたのが俳諧であったと考えている。俳諧は武士仲間との文事、伯兄の羅文らと一座した寛政期の俳席は、馬琴が武家滝沢家の一員「滝沢解」であることを確認するための場であったとみなしうる。馬琴の帰属意識が武家の側にあったことなど、拙稿「『曲亭』号・『山梁貫淵』号について——謬説クルワノウマゴト・クルワでマコト——」（『近世文芸』74）に説いたとおりである。付記すれば、文化年間（一八〇四～）に入ると馬琴は俳諧と疎遠になる。『自撰自集雑稿』に「文化已来は俳諧にあそはず。多くは人の需に応する扇面或は画賛のみ也」とある。直接には寛政十年の羅文の死を原因とするのだが、文化期から本格的に取り組んだ半紙本読本に、黄表紙とは異なる手ごたえを感じたのであろう。馬琴は読本を、経世済民を説きうる武士の仕事と認め、俳諧を必要としなくなったと思わ

れる。

馬琴研究の歴史をふりかえると、浜田啓介氏「寛政享和期の曲亭馬琴に関する諸問題」(『国語と国文学』55-11)、服部仁氏「『曲亭蔵書目録』より見た馬琴の俳諧」(『曲亭馬琴の文学域』)、神田正行氏「『俳諧歳時記』の成立」(『芸文研究』71)などが備わるものの、馬琴の俳諧に注目する議論は少ない。馬琴年譜の基準となる「馬琴年譜稿」(『ビブリア』37・38)や板坂則子氏作成「馬琴年表」(『図説日本の古典』19『曲亭馬琴』)も、俳諧に関する記述は簡略である。本稿では、「曲亭叢書」にのこる一次資料を整理し、未紹介の馬琴識語などを引きながら、享和年間まで、馬琴の俳歴をまとめたい。

馬琴俳諧年譜稿

安永二年(一七七三) 七歳

春

うぐひすのはつ音に眠る座頭かな

『罔両談』(『曲亭遺稿』)・「文政元年十二月十八日牧之宛書翰」(『馬琴書翰集成一』)・『自撰自集』

安永五年(一七七六) 十歳

夏

門どくの菖蒲も枯れて蟬のこゑ

「同牧之宛書翰」『自撰自集』

安永六年(一七七七) 十一歳

ちかい事かなくといふ題を得て

かよひくる千里の道も一トときに(『同牧之宛書翰』)

安永九年(一七八〇) 十四歳

十月

木がらしに思ひたちけり神の供(書翰)

「同牧之宛書翰」『吾仏乃記』『家廟遺墨』第三卷

『自撰自集』

* 主家松平家を出奔するさい部屋の障子に書きつけた句。

天明元年(一七八一) 十五歳

夏

『露川責』(早大、曲亭叢書イ四一六〇〇—一七一)を山

本宗洪から贈られる。

* 内題は「口状」。支考が露川の言説や虚実論を論難した書。

* 第一丁ウラに馬琴識語(句読点など筆者、以下同)。

寛政十年八月以降筆。墨書。

この書は山本宗洪翁、俳名兔岡、啓俊院の父、壮年のころ謄写し給ひしとぞ。解か十五六歳のころしはらくかしこに侍りし日、老のかたみにとて賜りしなり。そのち家兄羅文居士にまゐらせにき。家兄なくなり給ひしかは、復わか家におさめおくものなり。

* 最終丁ウラに馬琴識語。文政五年六月十九日。朱筆。

此書は官医山本宗洪翁壯年の比謄写せしもの也とて予におくり給りしになん。兔岡ハ彼翁の俳名にて、五色墨の白兔園宗瑞か弟子なりしと聞ゆ。是則侍医啓春院法印の父なり。これを給りしは天明元年の夏の比にやありけん。今茲書をさらすとてとう出たればしるしおくのミ。四十年来一夢のことし。昔をしのふかたみにそ有ける。文政五年壬午六月十九日 馬琴。

* 後見返しに宗洪筆の識語。

延享二乙丑年四月中旬写之／兔岡。

伯兄興旨が越谷吾山に入門し俳号を可楼から羅文に改める。

〔吾仏〕

天明二年（一七八二）十六歳

正月

〔東海藻〕

* 越谷吾山編の歳旦帖。

* 本書の口絵は『南総里見八犬伝』第四輯見返し図に用いられる。本書口絵「龍鳳」画「寅將軍明文童図」は、『南総里見八犬伝』第四輯見返し「戌將軍」図とほぼ同一。異なるのは、上部に描かれる星が『東海藻』の七星に対して、『八犬伝』では左に一星をくわえて八星とする点である。本書に馬琴の句はのらないが、馬琴が閲読したのは確實である。

* 羅文・姑山・文篁・金馬・蘇山・春蟻・東子入集。

同年中

吾山に入門。十六歳から点取俳諧、後に狂歌、和歌に移る。

〔文政元年十二月十八日牧之宛書翰〕

天明三年（一七八三）十七歳

正月

〔東海藻〕に三句入集。

蓬萊や置あまりたる月と花

市中に市立つく師走かな

一堤隴に暮る柳かな

* 馬琴号の初出。

* 羅文・金馬・蘇山・文篁・姑山・竹ノツカ東子入集。

先ひらくものあり花のはつ曆

天明癸卯歳旦（『自撰自集』）

春

吾山の月並の俳席に加わる。戸田家に仕え、羅文と同居す

る（『吾仏』）。

同年中

わかれてはひとつになるや露の玉

師竹庵吾山評兼題露（『自撰自集』）

うす月を見なくすころやはつ氷

渋柿や汝はしらぬさかひ論

天明三年の吟（同）

天明四年（一七八四）十八歳

正月

『東海藻』に三句入集。

月雪の友先つ来たり今朝の春

猿曳は猿にはおりや衣くはり

藪入やむくらの宿を歌まくら

* 羅文・金馬・蘇山・文篁・姑山・竹ノツカ東子・春蟻
入集。

* 「月雪」の句は、天明四年の歳旦摺物（林美一「亭々
亭と滝沢屋」「馬琴日記」「月報4」）、『自撰自集』にも
句形を違えてのる。

としなみのそこによするか魚の店

天明四年歳旦の摺物（「亭々亭と滝沢屋」「自撰自集」）

七種を見ことにうちぬひたり利

天明四年歳旦の摺物（「亭々亭と滝沢屋」）

二月廿七日

『年詣歌仙行』（『東岡舎附合集 自天明三年／至寛政六年
全』曲叢一一三）

* 表紙

きさらき二十七日

年詣哥仙行

判者／後々雪中庵

東岡舎／三吟

* 金馬・羅文・馬琴の三吟。

* 最終丁ウラ

天 金馬 三十八点／地 馬琴 三十五点／人 羅文 三十
二点

* 年記なし。合冊位置や天明五年には山帯と改名してい
た「金馬」（『東海藻』）から、天明四年と推定。『年詣歌
仙行』の前に合冊されるのは『天明三癸卯弥生五日／哥
仙行』（馬琴不参加）である。

三月

戸田家を去り、竹の塚の俳友の元に寓居する（『吾仏』）。

* 竹塚東子であろう。東子は天明二〜五年『東海藻』に
入集する吾山門下。

天明四年〜五年か

俳諧百韻興行（曲叢一一三）に加わる。

* 表紙なし。書名・年記など記載なし。合冊位置から天
明四、五年と推定。

* 判者、完来・不齋公。五弦・とし丸・馬琴・羅文・柳
枝ら。

* 最終丁ウラ

完来 五弦／とし丸／馬琴

不齋公 五弦／とし丸／柳枝

天明五年（一七八五）十九歳

『東海藻』に甲府にいた羅文入集。馬琴の句はのらない。

天明六年（一七八六）二十歳

三月

『歌仙花ふたつ』（曲叢一一三）

*表紙

天明六年弥生／夜話之留吐

哥仙花ふたつ

東岡舎

*羅文・馬琴の両吟。

天明七年（一七八七）二十一歳

正月

野あそびの跡しらぬ火やつくぐし

天明丁未の春興（『自撰自集』）

三月

俳文集『俳諧古文庫』（早大へ五―一九五四、『続燕石十種

二』）を編む。

*巻頭に寛政十一年八月の馬琴識語。

此書は余がいまた廿一のとし仮初に集たる俳文にて、

後に再考するにいとく拙きこと少からず。殊に予が

作文などふたゝび見るべくもおもはず。かさねて閑あ

る日正し補ふべし。／寛政十一己未八月（馬琴）

*早大馬琴自筆本の「馬琴」はすべて墨で塗り潰されて
いる。

*「自序」「作者列伝」吾山・文篁・山帯・姑山・時得・

扇波・羅文・鶏忠・馬琴。

秋

*馬琴の俳文は十編。

ぬ（か）つけは墓に声あり秋の風

鶏忠の墓に詣て（『自撰自集』）

天明八年（一七八八）二十二歳

正月

去年ことしく世ゆきゝのまつかざり

天明戊申ノ歳旦（『自撰自集』）

十二月

『ゆきを花』に句をよせる。

消やすき硫黄の花や雪燈籠

*井上春蟻序の吾山一周忌追善集。馬琴のほか、姑山・

羅文・文篁・山帯入集。

*早大蔵版本（へ五―一八〇九）は馬琴旧蔵本。

寛政元年（一七八九）二十三歳

七月

『罔両談』（『曲亭遺稿』）を編む。

*吾山三回忌の秋に師をしのび俳諧の雑説をまとめた書。

*寛政十一年八月の馬琴識語あり。文面は『俳諧古文庫』

とほぼ同じ（省略）。羅文序。

十二月十七日

『亡師三回忌／追善』（曲叢一一三）

*吾山三回忌追善の歌仙。羅文・馬琴の両吟。羅文筆。

*表紙

亡師三回忌／追善

東岡舎

*「曲亭」号の初出。前記拙稿「『曲亭』号・『山梁貫淵』号について」参照。

寛政三年（一七九一）二十五歳

正月

黄表紙初作『尽用而二分狂言』に俳諧宗匠姿で登場し張果坊馬琴と名のる。

寛政五年（一七九三）二十七歳

正月

黄表紙『荒山水天狗鼻祖』あらかみづてんぐのはじまりに自身を俳諧宗匠姿で描く。

七月下旬

結婚、飯田町に移り住み、羅文と往来を重ねる。

寛政七年（一七九五）二十九歳

正月

『俳諧和漢歌仙行』（曲叢一一三）

*表紙

完来／真顔評

俳諧和漢歌僊行

乙卯／初春

両吟

*馬琴・羅文による和漢歌仙。

寛政八年（一七九六）三十歳

一月二十五日

『俳諧連歌百韻』

（『東岡舎附合集 自寛政二年／至同十年 全』曲叢一一二）

*表紙

評者 完来／真顔

俳諧連歌百韻

丙辰孟春廿五日羅文亭興行

表八句并月花折端執筆出吟

各十八句／蘇山／狐遊／馬琴／催主 羅文

*最終丁

完来 天蘇山六十三点／地狐遊五十点／人羅文

四十七点

二月二日

『俳諧連歌百韻』（曲叢一一二）

*表紙

判者 嵐亭／并楽評蛙水

俳諧連歌百韻

丙辰如月二日曲亭開筵

表八句并月花折端執筆出吟

各吟廿五句／狐遊／羅文／催主 馬琴

*最終丁

天馬琴 九十一點／地羅文 六十四點／人狐遊 四十

六点

三月三日

『鯉鱗』

〔東岡舎附合集 自寛政七年／至同十年 全〕曲叢二一四

*表紙

鯉鱗

寛政捌三月三日

仙水亭

*羅文・馬琴・李期・素蛙・里角・芦秋らの歌仙。

三月二十八日

『月次之俳諧第三席／百員』（曲叢二一一）

*表紙

判者 宜麦／附 不騫公御評

月次之俳諧第三席／百員

丙辰暮春念八日曲亭興行

表八句月花折端執筆吟声

各十八句言／狐遊／羅文／蘇山／莚主 馬琴

*最終丁

（夫水）天 馬琴 六十七点／地 羅文 四十八点／人

蘇山 四十五点

（不騫公）天 馬琴 六十三点／地 羅文 五十五点／人

狐遊 四十三点

四月二十三日

『月次第四席／俳諧之連歌百韻』（曲叢二一四）

*表紙

判者 雪万／附 楽評 春花亭君 両評

月次第四席／俳諧之連歌百韻

辰卯月廿三日蘇山亭興行

表八句月花折端執筆吟

各十五句言／狐遊／羅文／馬琴／時得／催主 蘇山

*最終丁

蘇山 五十三点／羅文 四十一點／馬琴 三十四点

五月二十六日

『月次俳諧第五席／百声』（曲叢二一四）

*表紙

判者 野逸／附 楽評 東舎 両判

月次俳諧第五席／百声

辰五月廿六日時得亭興行

表八句月花折端筆 催主 時得

各十五吐／狐遊／羅文／馬琴／蘇山

*最終丁

（野逸）馬琴 五十二点／蘇山 四十六点／時得 四十

二点

（東舎）馬琴 四十九点／狐遊 三十八点／蘇山 三十

六点

六月十日

『月次第六席／俳諧之連歌百韻』（曲叢一一四）

*表紙

判者 完来／民玉 両評

月次第六席／俳諧之連歌百韻

辰水無月十日芳艸亭興行

表八句月花折端執筆陰／内月花一句つゝ持

各十九句言／蘇山／羅文／馬琴／催主 狐遊

*最終了

（完来）蘇山 八十一／羅文 七十四／馬琴 四十九

（民玉） 八十二 六十八 六十

七月十六日

『月次第七会附席臨時興行／四本柱歌仙合』（曲叢一一四）

*表紙

行事 雪中庵完来／嵐亭富屋 評

月次第七会附席臨時興行／四本柱歌仙合

寛政八丙辰年／四月三日之兼題／同七月十六日満尾

春 羅文／夏 蘇山／秋 馬琴／冬 狐遊

勸進元東岡舎／差添中人亭（馬琴）

*最終了

行司完来 大関 馬琴 百十三点／関脇 羅文 百十点／小

結 狐遊 百六点 蘇山 百六点

行司嵐亭 大関 羅文 百十七点／関脇 馬琴 九十点／小

結 狐遊 八十六点 蘇山 八十六点

七月二十日

『月次第七席／俳諧之連歌百韻』（曲叢一一二）

*表紙

宜麦／民玉 評

月次第七席／俳諧之連歌百韻

寛政第八年歳宿丙辰／秋七月廿日曲亭興行

筆句如例各吟十八句

蘇山／狐遊／羅文／菟 馬琴

*最終了

天 馬琴 九十五点／地 狐遊 七十七点／人 羅文 七十

七点

九月七日

『子姪に俳諧を禁するのふみ』（曲叢一七二）を謄写する。

*漢学者・歌人の幕臣、成島鳳卿（錦江）著。俳諧の卑

俗を述べる書。標題は内題による。

*最終了ウラに馬琴識語。

此書借室洲子而謄写了／寛政八年丙辰九月七日／滝沢

解書。

十一月十三日

『月次第八席年籠／巳元旦開／百韻』（曲叢一一二）

*表紙

判者 完来／民玉

月次第八席年籠／巳元旦開／百韻

寛政八丙辰冬十一月十三日書／東岡舎興行

表八章外月花折端執筆吟／各十八吐

狐遊／蘇山／羅文／馬琴／莚主 仙水主人（羅文）

*最終丁

完来評 天 蘇山 六十九点／地 馬琴 六十八点／人

羅文 六十七点

民玉評 天 羅文 七十七点／地 蘇山 六十八点／人

馬琴 五十七点

寛政九年（一七九七）三十一歳

正月

黄表紙『武者合天狗俳諧』刊。

*俳諧を趣向とする。見開き一丁ごとに題を掲げ、左右
に同じ構図の絵を並べ、発句、評をのせる。

正月十六日

『月次初席／俳諧連歌百韻』（曲叢一一四）

*表紙

判者 完来

月次初席／俳諧連歌百韻

寛政九年正月十六日之席／蘇山亭文台開興行

各吟十六句執筆二十句

羅文／狐遊／蘇山／馬琴／時得／名簿因二順／莚主

蘇山

*最終丁

天 馬琴 六十四点／地 羅文 五十六点／人 蘇山 五十
三点

二月十三日

『月次第二席／俳諧之連歌百韻』（曲叢一一四）

*表紙

判者 完来／民玉 両評

月次第二席／俳諧之連歌百韻

寛政九年丁巳春二月十三日／芳艸亭興行

表八句花折端／執筆吟

馬琴／狐遊／蘇山／羅文／右二順各十八吟／東道 芳

艸

*最終丁

完来点 天 馬琴 六十六点／地 羅文 六十三点／人

蘇山 六十二点

民玉点 天 狐遊 七十六点／地 馬琴 七十六点／人

羅文 五十三点

*卷末に馬琴識語

民玉の批判尤あやまり多かり。依て馬琴又そのあやま
りを正したり。嘲老烏庵文一編を綴れり。こは別巻に
あり。

二月二十八日

『月次第二席俳諧百員卷中／老烏庵評批言の弁』

（曲叢四八、『曲亭遺稿』）

*表紙

月次第第二席俳諧百員卷中／老鳥庵評批言の弁

田門外の市人／慢誌

*前項馬琴識語参照。

三月二十三日

『賦何駒俳諧之連歌追善之百韻』（曲叢一一二）

*表紙

判者 蛙水／雪碓

賦何駒俳諧之連歌追善之百韻

時寛政九年丁巳春三月廿三日於曲亭興行

同四月十七日於東岡舎開卷

坐客 狐遊／蘇山 催主 羅文／馬琴

*最終丁

雪碓 天 羅文 七十七点／地 蘇山 六十九点／人 馬

琴 五十二点

蛙水 天 蘇山 八十六点／地 馬琴 六十二点／人 狐

遊 四十七点

三月二十六日

『夢見艸』（曲叢一〇八、『曲亭遺稿』）

*父興義の二十三回忌、母門の十七回忌追善百韻。

東岡舎羅文輯／曲亭馬琴補正

羅文／馬琴／蘇山／狐遊／兼子氏新賀（羅文叔父）／

時得／路洲／執筆／羅文女弟鈴木氏妻秀／羅文女弟田

口氏妻菊／通家路洲／袖のうら雪碓／かつしか蛙水

* 鷄忠追福。馬琴・羅文。羅文娘回向。羅文・羅文妻・

馬琴・同藩逸声・雪碓。

七月

『風月庵主に答るふみ』（曲叢四七、『曲亭遺稿』）を綴る。

* 風月庵雪碓と面談したさいの難問を再案し答えた文。

「和音」「うくてふ魚のうた」「なてし子咲る火桶」「吹飯

の鶴」「青山の時鳥」「古池のかはづ」の考証。

寛政十年（一七九八）三十二歳

正月二十日

『月次初席／俳諧之連歌百韻』（曲叢一一四）

*表紙

判者 完来

月次初席／俳諧之連歌百韻

寛政十年春正月廿日／芳艸亭興行

表八章月花折端／執筆持

各十八言／欠席 蘇山／羅文／馬琴／鉄矣／廷主 狐遊

*最終丁

天 馬琴 七十四点／地 羅文 七十一一点／人 狐遊 五十

点

二月十六日

『月次第第二席／俳諧百韻』（曲叢一一二）

*表紙

完来評

月次第二席／俳諧百韻

寛政十年戊午二月十六日

各十五吐／余執筆持

蘇山／狐遊／逸醒／馬琴／右来客着順／莛主羅文

*最終丁

天 狐遊 五十五点／地 羅文 五十三点／人 馬琴 五十

二点

二月廿五日

『草庵月次初席／俳諧連歌五十韻』（曲叢一一二）

*表紙

草庵月次初席／俳諧連歌五十韻

戊午歲如月廿五日

各九吐／詩舫／羅文／芳名／曲亭 執筆

*最終丁

天 詩舫 四十四点／地 芳名 三十点／人 羅文 二十六

点

三月四日

『草庵月次第二席／賦何衣俳諧之連歌百韻』（曲叢一一二）

*表紙

判者完来

草庵月次第二席／賦何衣俳諧之連歌百韻

戊午暮春四日之席

曲亭執筆

四月十一日

『月次第三／俳諧連歌百韻』（曲叢一一二）

*表紙

午心評

月次第三／俳諧連歌百韻

戊午初夏十一日之席

各十八吐余執筆補之

曲亭／執筆

*最終丁

天 蘇山 七十四点／地 羅文 七十点／人 馬琴 六十五

点

五月二十五日

『月次第五席／俳諧之連歌百韻』（曲叢一一四）

*表紙

完来判

月次第五席／俳諧之連歌百韻

寛政十戊午歲／五月廿五日

鉄矣／羅文／馬琴／欠席 蘇山／莛主 狐遊

*最終丁

天 馬琴 七十九点／地 羅文 七十四点／人 狐遊 六十

二点

*最終丁ウラに馬琴識語。

此百員限りにて、おなしき七月十九日より羅君病にふし給ひて、終になくなり申されたれば、この巻そ生前(マ)の片見なめりと、今更なつかしくこそおもひ奉れ。／馬琴書。

八月十二日

羅文が亡くなる。

* 神田正行氏『羅文居士病中一件留』解題・翻刻、上・下(三田国文) 24・26 参照。

八月二十五日

『東岡舎藏(書) 目録』(曲叢四七)を編む。

* 神田正行氏「馬琴所持の俳書について 附・『東岡舎藏書目録』翻刻」(三田国文) 25 参照。

十一月

『俳諧有也無也之関』(曲叢一一五)に識語する。

* 羅文筆写本。明和元年刊、芭蕉に仮託した俳諧伝書。

* 巻頭に馬琴識語。

此書は家兄羅文居士みつから謄写し給ふ所也。吾兒孫殊ニ秘蔵すへきものぞ。寛政十戊午年十一月 馬琴。

『続岡両談草稿 東岡舎記』(曲叢一〇六)に識語する。

* 羅文筆写本。

* 後見返しに馬琴識語。年記なし。前記『俳諧有也無也之関』と同時期の識語か。

この書は、亡兄羅文居士、寛政の初年の比、かりそめ

に書つめ給ひし草稿也。官袴いとなきによりて、またく成らすしてやみにき。吾曹たらんもの秘蔵すへきものになん。愚弟馬琴しるす。

『俳諧論』(曲叢一七〇)に識語する。

* 天明二年八月、仲兄鶏忠筆写本。雲裡の俳書。

* 見返しに馬琴識語。年記なし。前記『俳諧有也無也之関』と同時期の識語か。

この書は仲兄鶏忠ぬし、伯兄羅文居士の囑によりて謄写し給ひしもの也。吾曹よろしく秘蔵すへし。馬琴。

* 最終丁に羅文識語。

此俳諧論一部ハ師兄山帶子ヨリ借受、弟鶏忠か筆をかり写置ぬ。俳諧論ト題スル書、世ニ二品アリ。一ツハ此みの、雲裡か書也。又一ツハ橘のよしふるといへるもの、書ニて、其見俳諧ニ詮なき書也。

時天明三癸卯仲秋 羅文誌。

寛政十年以前

『三体歌仙行之内／正風体』(曲叢一一三)

* 年記なし。

* 表紙

三体歌仙行之内／正風体

* 馬琴・羅文の両吟十七句。

『三体歌仙行之内／談林体』(曲叢一一二)

* 年記なし。

*表紙

三体歌仙行之内／談林体

*羅文・馬琴の両吟十一句。

寛政十一年（一七九九）三十三歳

正月

黄表紙に俳諧に遊ぶことを書入れる。

*『料理茶話即席説』

俳諧と狂詩の会が繁々だから、作の案じのじやまになる。こまつたものだ。

*『鯨魚尺品革羽織』

ついでに芝の嵐亭子へも訪れませう。たしか十日はせき庵の発句会だといふことだ。

十月十三日

『笠の露』（曲叢一〇九、『曲亭遺稿』）を編む。

*羅文一周忌追善句文集。

*蘇山写「東岡舎羅文居士像」・滝沢氏墓の模写図を

『曲亭遺稿』は収録しない。

*蘇山・狐遊・自得・鉄矣・詩舫・雪碓・雪中庵完来ら。

*京伝・京山・唐来庵三和・田町曰琳も文や句を寄せる。

寛政十二年（一八〇〇）三十四歳

八月十二日

『夢の秋』（曲叢一一〇、『曲亭遺稿』）を編む。

*羅文三回忌追善十百韻。

*馬琴・五川・蘇山・狐遊・自得・田舎ら。催主狐遊。

雪碓評 天馬琴 五百五十九点／地蘇山 五百五十九点

人五川 四百七十九点

馬琴自評 天蘇山／地五川／人自得 狐遊 田舎

*作者姓氏。

雪碓／風月庵／壺中庵／酒井右京亮家士／吉岡定八郎

蘇山／六花楼／東澗／戸田大学家士／豊田次右衛門

自得／初時得／登竜舎／同家中／松居藤左衛門

田舎／自得男／同家中／松居藤馬

狐遊／芳艸亭／八木十三郎家士／遠山伝左衛門

五川／初鉄矣／調布庵／同家中／林長右衛門

右六友いつれも亡兄旧知之俳友也

*羅文の俳友は『吾仏』『滝沢家譜第二・羅文譜』によ

ると、天明初年当時、「自得」「烏川、後に蘇山」「文篁、

後に雪碓」「金馬、後に山帯」（永井伊賀守の近習石倉又

三郎）「姑山、後に素鹿」（御扈従水野吉之丞の近習川嶋

男也）らがいた。蘇山以下は吾山の門人。寛政中に至り

「狐遊（狐遊）」あり。山帯ははやく死す。雪碓・自得・

蘇山・狐遊は始終の友。

同年中か

『羅文大祥記追薦句帖』（曲叢一一一）を作る。

*『夢の秋』を句帖に仕立てたもの。題名記載なし。標

題は、柴田光彦氏「饗庭篁村と坪内逍遙」（跡見学園女

子大学紀要31」による。

『俳句帖』(曲叢一一六〜一一八)を編む。

* 題名、成立年の記載なし。標題は前記柴田論文による。

『俳句帖』は『羅文大祥記追薦句帖』(曲叢一一一)と料紙が同じ、装丁も似通う。両書は同時期の成立と推定する。

* 雪中庵完来評。馬琴・羅文・可蝶(興義)・蘇山・狐遊・時得らの句を収録。

享和元年(一八〇一)三十五歳

正月

黄表紙『敵討蚤取眼』刊。

* 俳諧を趣向とする。「蚤に関する発句を発端より第十回まで：掲げ：句意に関連させながら：話を展開して行く」(岩田秀行氏『敵討蚤取眼』翻刻・略注)「跡見学園女子大学国文学科報15」。

享和二年(一八〇二)三十六歳

五月から八月

京坂旅行。旅中の句は『羈旅漫録』『自撰自集』など参照。

享和三年(一八〇三)三十七歳

三月

『俳諧歳時記』刊。

* 寛政十二年から編集にとりかかる(『近世物之本江戸作者部類』)。前記服部・神田論文参照。

五月

『蕉門頭陀物語』(曲叢一七三)を謄写する。

* 涼袋(建部綾足)著『芭蕉翁頭陀物語』。寛延四年刊、芭蕉および蕉門俳人の逸話集。

* 「簑笠隠居」号の初出。刊本では文化元年以降。

* 一丁オモテ・ウラに墨書の馬琴識語。朱書の注は省略。

(前略)こはおのれ総角のころ、ひとたび師竹庵にて見たりしを、おぼろくおもひ出て、俳話のついで、家兄とこの書の事を語あへりき(後略)。

享和三年夏五月謄写於著作堂雨窓并施雌黄注之畢

簑笠隠居。

* 後見返しに墨書の馬琴識語、朱書の注。

この書余か自筆の写本なり。うやむやの関、はいかい論と合せてわか曹よろしく秘蔵すへし。／馬琴。

(朱書の注)

ウヤムヤノ関、又美濃雲裡俳諧論、コノ二書ハ亡兄鶏

忠君謄写ノ本ナリ。

注

一 * は筆者の注記である。『曲亭遺稿』など、翻刻のある書については略記にとどめた。

二 『自撰自集雑稿』の寛政・享和年間の句は省略した。

三 本文中に引用した文献は以下の通りである。

『自撰自集雜稿』文政七年成稿。国会図書館所蔵写本による。
『曲亭馬琴歌集上・下』（朝倉治彦他編、昭和二十六年）に翻刻される。

『曲亭遺稿』明治四十四年、国書刊行会刊。

『馬琴書翰集成一』柴田光彦・神田正行編、二〇〇二年、八木書店刊。

『家廟遺墨 第三』「文化五年夏五月粘／文政七年肆月修復」、滝沢家蔵、天理図書館寄託。

『吾仏乃記』天保十四年成稿。木村三四吾他編校本（昭和六十二年、八木書店刊）による。

『東海藻』天明二・五年は富山県立図書館志田文庫本、同三・四年は岩瀬文庫本による。

『近世物之本江戸作者部類』天保五年成稿。木村三四吾編校本（昭和六十三年、八木書店刊）による。

付記

本稿をなすにあたり、柴田光彦先生、萩原恭男先生の御教示を得ました。記して感謝申し上げます。